広報市民リポーターだより

昭和63年度の広報市民リポーターによる執筆は今号が最終回です。今回は取材報告ではなく、各リポーターが今感じていること、考えていることなどを自由に書いてもらいました。

だれかのために そして自分のために

畠山　智子

私たちの生活の周りで、さまざまなボランティア活動が定着してきていますが、果たしてどれくらいの理解が得られているのでしょうか。

子供たちのため、身体の不自由な人たちのため、お年寄りのためにと、たくさんの無償の愛による活動が心を込めて、時には自分の生活に支障をきたしながらも行われています。しかし、ボランティア活動に携わるほとんどの人が、一生懸命になればなるほど思うに任せない状況にぶつかったり、肝心な市の公共機関での〝こころ〟無い事務的な対応に戸惑い、時には腹立たしさを感じているようです。ボランティアというものにこそ、臨機応変な対応が是非とも欲しいものです。

日常生活の中で、心のすれ違いがあったり、思うように相手に気持ちが伝わらなかったり、また、つらく苦しい時や悲しみのどん底にある時でも、私たちは一生懸命生きていかなくてはなりません。人それぞれにその〝一生懸命〟が違っても、時には人の力を借り、時には人に手をさしのべる。そんな心と心の触れ合いを大切にして、自分だけの殻は破ってみてはどうでしょうか。

ボランティアは、けっして人のためにだけではなく、それぞれが自分自身のために汗して頑張っているのだと思えるのです。

畠山　智子リポーター（相染沢中岱）

取材を振り返って

成田　弘美

農家の後継ぎたちの集まりである団体を二度にわたって取材しました。どちらも新規の加入者不足による会員の減少傾向が最近顕著で、それが組織率の低下や会員不在地区の増加を招き、活動そのものにさえ影響を及ぼしてきているような現状でした。

こうした若者の農業離れや無関心に対して、もちろん行政や農業団体も後継者〈担い手〉育成などのためにさまざまな対策を講じています。しかし、指導する機関・団体は数多くありますが、指導を受ける農家は一つですから、それぞれの立場にとらわれ過ぎることのない、指導機関同士の連携による対処が今後更に必要とされるでしょう。

受け入れ側の農家としては、自分の田にだけ水が入れば良いというような従来の意識を変える必要があると思います。そして、農業が抱えている問題について、単に感情論的な反論に終始するのではなく、建設的な将来への展望を堂々と述べるべきでしょう。そのためにも専業、兼業農家ともに自分たちの置かれている立場を見つめ直し、自ら認識を高めることが大事だと思うのです。

農家の後継ぎとしてムラの中に根を張っていく若者たちが、農業に対する問題意識を通じて基本的な認識を高めることは、地域社会の活性化に不可欠ではないでしょうか。

成田　弘美リポーター（柄沢）

ロマンのふるさと 大館はこれから

石川　富男

平成が明けて暦の上ではもう啓蟄（けいちつ）が近づいています。小川の水が温み、桃の芽がふくらみ、やがて緑にもえる山河は、大自然の奏でるパフォーマンスです。

先般行われた環境庁の「みどりの国勢調査」によると、植物群落データで、秋田県とその隣接地帯が上位にランクされていました。豊かな天然資源に恵まれた大館市は、名実ともに緑のメッカといえるでしょう。

菅原　馨リポーター（葛原）

おことわり・菅原リポーターは、急用のため執筆できませんでした。